

THE KENKYUSHA
DICTIONARY OF
ENGLISH LINGUISTICS
AND PHILOLOGY

新英語学辞典

監修

大塚 高 信

中 島 文 雄

研究社

THE KENKYUSHA
DICTIONARY OF
ENGLISH LINGUISTICS
AND PHILOLOGY

新英語学辞典

監修

大塚 高信
中島 文雄

KENKYUSHA

THE KENKYUSHA DICTIONARY OF
ENGLISH LINGUISTICS AND PHILOLOGY

新英語学辞典

初版 初刷 1982年11月

4刷 1983年9月



監修者 大塚高信 中島文雄
発行者 植田虎雄
発行所 株式会社研究社
〒101 東京都千代田区神田駿河台2の9
電話 編集(03)291-6845
業務(03)291-2301
振替 東京9-32260
本文組版 新研究社印刷株式会社
写真製版 株式会社近藤写真製版所
本文印刷 三英印刷株式会社
本文用紙 三島製紙株式会社
クロス 東洋クロス株式会社
製本 研究社製本株式会社
製函 株式会社加藤製函所

序

『研究社英語学辞典』が刊行されたのは1940(昭和15)年1月のことであった。この辞典は広く用いられて幾度も刷を重ねたが、戦後の言語学の急速な進展に対応できないのは止むをえないことであった。1969(昭和44)年、研究社から大塚高信博士と私とに、新しい英語学辞典を企画したい旨の意思表示があり、翌年5月、われわれ二人と研究社の小酒井益蔵、植田虎雄、河野亨雄の三氏との会議において、もとの『英語学辞典』はそのままにして、それとは別の『新英語学辞典』を編集することに決定した。(もとの辞典の編者市河三喜先生はこの年の3月17日に逝去された。)そして英語学の研究分野を数部門にわけ、各部門の編集を専門の学者にお願いする方針をたてた。さいわいに次の諸教授の快諾をえて、編集の陣容が整った。(部門別は便宜的な名称にすぎない。)

井上 和子	国際基督教大学教授	(新言語学)
太田 朗	東京教育大学教授(当時)	(新言語学)
安井 稔	東北大学教授(当時)	(新言語学)
宮部 菊男	東京大学教授(当時)	(言語学、語形成)
福村 虎治郎	北海道大学教授(当時)	(語論一名詞・代名詞・動詞)
毛利 可信	大阪大学教授(当時)	(語論—上記以外の品詞、統語論、 文法一般、数理言語)
荒木 一雄	名古屋大学教授	(音声学、文字・表記)
榊井 迪夫	広島大学教授(当時)	(詩学、修辞学、文体論)

かくて1970年8月、第1回の編集者会議が開かれ、以後何回かの会議を重ねて収録すべき項目や見出し語、その執筆分量などについて検討が行われた。これらの仕事を進めるに当り、編集協力者として

寺澤 芳雄 東京大学助教授(当時) 三宅 鴻 成蹊大学教授(当時)

の両氏が参加され、大きな推進力となった。両氏は訳語の統一をはかるため「英日用語対照表」を、また日本語からも検出できるように「日英用語対照表」を作成され、また「執筆要項」をまとめられた。これらの作業は多大の労力と時間を要したので、実際に執筆の依頼を始めたのは1974(昭和49)年の7月になってからであった。

執筆が開始されたのちも、なかなか順調にことは運ばなかった。言語学の新分野や新動向を追いかけていては限(きり)がないので、昨年(1981)末をもって打切ることにして未完の原稿を督促し、ようやく新辞典の完成にこぎつけた。編集最後の追いこみに山中桂一(東京大学助教授)、河西良治(中央大学助教授)両氏の助力をお願いした。また資料の調査・整理については石川和弘(清泉女学院教諭)、馬場彰(岡山大学助教授)、福島治(電気通信大学助教授)、山県宏光(東京大学助教授)の4氏に、校正その他については内川和彦(東京大学教養部助手)、小林絢子(東京大学大学院博士課程)の両氏に協力していただいた。研究社の長島伸行、鈴木康之の両

君が終始縁の下の力持ちの役をしてくれたことも特筆しておかなければならない。

このようにして、研究社『新英語学辞典』は多くの英語学者・言語学者の協力によって産み出された。思えば長い道中であつた。途中で大塚博士、宮部教授、執筆者の北市陽一、原田信一、前田護郎の3氏、小酒井益蔵研究社社長は故人となられ、他の編集者の方々も定年退職された方が多い。今や各大学の英語学・言語学担当者は、本辞典執筆者の若い方の世代になっている。本辞典の執筆者は99名に及び、誠に多士済々である。昔の『英語学辞典』の執筆者が、わずか10名そこそこであつたことを思うと、そのなかの一人であつた私としては、今昔の感にたえない。言語学のひろがりと研究者の層の厚さに驚くばかりである。本辞典の英語名が *The Kenkyusha Dictionary of English Linguistics and Philology* となつて、昔の辞典の英語名になつた *Linguistics* という語が入っているのは、言語学の発展を反映するものである。本書は言語学の辞典としても役に立つであろう。

この序文を書きながら、私は先ごろ（9月4日）に閉会した第13回国際言語学会議のことを思い出している。これは東京の日本都市センターを会場に開催された国際会議で、内外からの参加者は1300名をこえ、きわめて盛会であつた。8月29日夜のリセプションには皇太子、同妃両殿下がご出席になり、世界各国の言語学者と歓談された。また翌日の開会式にも両殿下のご臨席があり、皇太子よりお言葉があつた。そのなかで殿下は、ご自分の琉球語研究のことに触れられ、一同に深い感銘をあたえられた。以後の研究会議は、全体研究会議も一般研究会議も特別研究会議も、いずれも多数の参加者があり、研究発表と質疑応答が熱心に繰り広げられた。そこで扱われた問題は、言語研究に関するきわめて広い範囲にわたるものであつて、新理論に片寄るといふようなことはなく、国際的学界の健全さを示すものであつた。このような雰囲気国際会議に参加したわが国の若い言語研究者たちが、この上もない好い刺激をうけたであろうことは想像に難くない。この会議を周到に準備して見事に運営された組織委員会の方々の有能ぶりも国際的レベル以上と感嘆した。

このような内外の言語学界の情勢を思うとき、この『新英語学辞典』が、わが国の英語学徒やその他の言語研究者のために、研究推進の踏み台となるならば、執筆者一同の労は酬いられるであろう。

1982（昭和57）年9月

中 島 文 雄

凡 例

1 見出し語

1.1 原則として単数形で示した。

1.2 配列はアルファベット順。ただし、2 語 (以上) から成る見出し語は、その第一要素の語のアルファベット順とした (例えば **action noun, actional passive** の順)。例外的に、第一要素が 1 文字の場合は見出し語全体のアルファベット順とした。例えば **A-over-A principle** は **aorist** と **aphasia** の間に置く。

1.3 省略可能を示す () に囲まれた文字は数えて配列した。

2 発 音

2.1 見出し語および本文記述中の語に発音を示すときは、原則として米音の標準的なものに從った。

3 語 源

3.1 必要ある場合、見出し語の後に () に囲んで語源を示した。

3.2 語源略号

< 次の形から発達

← 次の形から借入

? 有力な説[推定]では

∞ 次の形と交代

* 再建形

4 部門表示

4.1 見出し語の後に、以下の略語で部門を示した。

『文』 文法学

『音』 音声学・音韻論

『数』 数理言語学

『言』 言語学

『詩』 詩学・韻律論

『論』 (記号)論理学

『史』 英語史

『修』 修辞学

『意』 意味論

『体』 文体論

5 項目内の区分

5.1 同一見出し語が 2 部門 (以上) に分属し、それぞれで解説を必要とする場合は I 『文』, II 『詩』 のように示した。

5.2 解説文中の区分は、基本的に (1), (2), (3), … で分け、下位区分は (a), (b), (c), …; (i), (ii), (iii), … とした。

さらに (1), (2), (3), … の上の区分として **a, b, c, …; 1, 2, 3, …; (A), (B), (C), …** などを適宜用いた。

5.3 上記の区分とは別に、単に条目列記のときは 1), 2), 3), …; a), b), c), … などを用いた。

6 出典について

6.1 出典は著者名と出版年代で示し、これにより巻末の文献表中の文献を検索できるようにした。例: Bloomfield (1933) = *Language* (1933)。

6.2 また、肩数字で改訂版の版数を示した。例えば W. P. Lehmann (1973²) は、当の文献の第 2 版が 1973 年に出版されたことを示す。

6.3 以下の 10 書に限り、年代の表示とせず、書名の略形を用いて出典を示した。

Fowler (MEU) = *A Dictionary of Modern English Usage* (1926, 1965²)

Jespersen (MEG) = *A Modern English Grammar on Historical Principles* (1909-49)

Jones (EPD) = *Everyman's English Pronouncing Dictionary* (1917, 1967¹³, 1977¹⁴)

Kruisinga (Handbook) = *A Handbook of Present-Day English* (1909-11, 1931-32⁵)

Mätzner (Grammatik) = *Englische Grammatik* (1859-65, 1880-85³)

Poutsma (Grammar) = *A Grammar of Late Modern English* (1904-26)

- Quirk & Greenbaum (UGE) = *A University Grammar of English* (1973)
 Quirk *et al.* (GCE) = *A Grammar of Contemporary English* (1972)
 Sweet (NEG) = *A New English Grammar* (1892-98)
 Visser (*Historical Syntax*) = *An Historical Syntax of the English Language* (1963-73)

7 用例の引用

7.1 引用例には原則として著者の姓のみを示した.

- a) 文学作品等からの引用例の場合: You have to stay in the army so goddam long. — Salinger
 b) 文法書等からの引用例の場合: There is but we two — [Jespersen]

7.2 作品名は, 原則として, 聖書, Shakespeare, Chaucer に限り示した (pp. xiii-xv の「略形一覧表」参照). なお, 聖書は *The Authorized Version* (現行流布版), Shakespeare は Clark & Wright (eds.), *The Works of William Shakespeare* (The Globe Edition), Chaucer は Robinson, *The Complete Works of Geoffrey Chaucer* (2nd Edition) に拠った.

8 見出し項目への参照

8.1 解説文中で小型頭文字 (SMALL CAPITALS) で綴りを示したものは, それが見出し項目となっていることを示す.

8.2 また, 矢印 ⇒ を用い, ⇒ の先の小型頭文字で示した項目でより詳しい (または関連した) 記述があることを示す. 例: 非音声的な分野は動作学 (KINESICS) と近接学 (proxemics ⇒ SOCIOLINGUISTICS) によって扱われている

8.3 空()見出し語を立てた場合, 他の見出し語と同一内容で後者に説明がある場合には = を用いて示し, 二者同一でなく後者のところで説明されている場合には ⇒ を用いて示した. 例: **genitive of gradation** 〔文〕 (差等の属格) = GENITIVE SUPERATIVE. / **separative pronoun** 〔文〕 (個別代名詞) ⇒ QUANTITATIVE PRONOUN.

9 諸記号の主な用法

- | | |
|---|---|
| 〔 〕 部門表示 (4 参照) | () 省略可能. 例: 形容詞(相当語句), c(a)esura |
| 《 》 慣用表示 (usage label): 《口語》, 《古》など | 術語の原語・訳語の表示. 例: 両唇閉鎖 (bilabial closure) |
| 地域表示: 《英》, 《米》など | その他, 付随的記述・説明など |
| [] 音声表示 | 音素表示 |
| 文法書からの引用の際の出典表示 (7 参照) | * 再建形. 例: *patér |
| [] 交替可能. 例: I don't like his [him] coming here so often. | 非文法的な語句・文などの表示. 例: *Himself was stabbed by Charley. |
| [] 補足説明 | |

10 略 語

abl.	ablative	int.	interjection	pres.	present
acc.	accusative	masc.	masculine	pret.	preterite
adj.	adjective	n.	noun	pron.	pronoun
adv.	adverb	neut.	neuter	sing.	singular
conj.	conjunction	nom.	nominative	suf.	suffix
dat.	dative	perf.	perfect	v.	verb
fem.	feminine	pl.	plural	vi.	intransitive verb
gen.	genitive	p.p.	past participle	vt.	transitive verb
inf.	infinitive	prep.	preposition	voc.	vocative

略形一覽表

1. 言語名

AF	Anglo-French	MDu.	Middle Dutch (1200-1500)
Afr.	African	ME	Middle English (1200-1500)
Afrikk.	Afrikaans	Mex.	Mexican
Am.	American	MF	Middle French (1400-1600)
Arab.	Arabic	MGk	Medieval Greek (700-1500)
Aram.	Aramaic	MHG	Middle High German (1100-1500)
Austral.	Australian	ML	Medieval Latin (700-1500)
Aves.	Avestan	MLG	Middle Low German (1100-1500)
Braz.	Brazilian	ModE	Modern English
Canad.	Canadian	N-Am.-Ind.	North American Indian
Celt.	Celtic	NF	Norman French
Chin.	Chinese	NGk	Neo-Greek (after 1500)
Corn.	Cornish	NL	Neo-Latin (after 1500)
Dan.	Danish	Norw.	Norwegian
Du.	Dutch	ODu.	Old Dutch (before 1200)
E	English	OE	Old English (before 1200)
Egypt.	Egyptian	OF	Old French (before 1400)
F	French	OHG	Old High German (before 1100)
Finn.	Finnish	ON	Old Norse
Flem.	Flemish	PE	Present-day English
Fris.	Frisian	Pers.	Persian
G	German	PG	Proto-Germanic
Gael.	Gaelic	Pol.	Polish
Gaul.	Gaulish	Port.	Portuguese
Gk	Greek	Prov.	Provençal
Gmc	Germanic	Russ.	Russian
Goth.	Gothic	Sc.	Scottish
Heb.	Hebrew	Scand.	Scandinavian
Hind.	Hindustani	Sem.	Semitic
Hung.	Hungarian	Skt	Sanskrit
Icel.	Icelandic	Slav.	Slav(on)ic
IE	Indo-European	Sp.	Spanish
Ind.	Indian	Swed.	Swedish
Ir.	Irish	Turk.	Turkish
It.	Italian	VL	Vulgar Latin
Jap.	Japanese	W	Welsh
L	Latin	WS	West Saxon
LG	Low German	Yid.	Yiddish
LGk	Late Greek (300-700)		
Lith.	Lithuanian		
LL	Late Latin (300-700)		

2. 聖書の書名

- Acts** *The Acts of the Apostles*
Amos *Amos*
1 Chron. *The First Book of the Chronicles*
2 Chron. *The Second Book of the Chronicles*
Col. *The Epistle of Paul the Apostle to the Colossians*
1 Cor. *The First Epistle of Paul the Apostle to the Corinthians*
2 Cor. *The Second Epistle of Paul the Apostle to the Corinthians*
Dan. *The Book of Daniel*
Deut. *The Fifth Book of Moses, called Deuteronomy*
Eccles. *Ecclesiastes, or the Preacher*
Ephes. *The Epistle of Paul the Apostle to the Ephesians*
Esth. *The Book of Esther*
Exod. *The Second Book of Moses, called Exodus*
Ezek. *The Book of the Prophet Ezekiel*
Ezra *Ezra*
Gal. *The Epistle of Paul the Apostle to the Galatians*
Gen. *The First Book of Moses, called Genesis*
Hab. *Habakkuk*
Hag. *Haggai*
Heb. *The Epistle of Paul the Apostle to the Hebrews*
Hos. *Hosea*
Isa. *The Book of the Prophet Isaiah*
James *The General Epistle of James*
Jer. *The Book of the Prophet Jeremiah*
Job *The Book of Job*
Joel *Joel*
John *The Gospel according to St. John*
1 John *The First Epistle of John*
2 John *The Second Epistle of John*
3 John *The Third Epistle of John*
Jonah *Jonah*
Josh. *The Book of Joshua*
Jude *The General Epistle of Jude*
Judges *The Book of Judges*
1 Kings *The First Book of the Kings or The Third Book of the Kings (in Greek and Latin Bible)*
2 Kings *The Second Book of the Kings or The Fourth Book of the Kings (in Greek and Latin Bible)*
Lam. *The Lamentations of Jeremiah*
Lev. *The Third Book of Moses, called Leviticus*
Luke *The Gospel according to St. Luke*
Mal. *Malachi*
Mark *The Gospel according to St. Mark*
Matt. *The Gospel according to St. Matthew*
Mic. *Micah*
Nah. *Nahum*
Neh. *The Book of Nehemiah*
Num. *The Fourth Book of Moses, called Numbers*
Obad. *Obadiah*
1 Pet. *The First Epistle of Peter*
2 Pet. *The Second Epistle of Peter*
Philem. *The Epistle of Paul the Apostle to Philemon*
Philip. *The Epistle of Paul the Apostle to the Philippians*
Prov. *The Proverbs*
Ps. *The Book of Psalms*
Rev. *The Revelation of St. John the Divine (Protestant) or The Book of the Apocalypse of St. John (Catholic)*
Rom. *The Epistle of Paul the Apostle to the Romans*
Ruth *The Book of Ruth*
1 Sam. *The First Book of Samuel or The First Book of the Kings (in Greek Bible)*
2 Sam. *The Second Book of Samuel or The Second Book of the Kings (in Greek Bible)*
Song of Sol. *The Song of Solomon*
1 Thess. *The First Epistle of Paul the Apostle to the Thessalonians*
2 Thess. *The Second Epistle of Paul the Apostle to the Thessalonians*

- 1 Tim.** *The First Epistle of Paul the Apostle to Timothy*
2 Tim. *The Second Epistle of Paul the Apostle to Timothy*

- Titus.** *The Epistle of Paul to Titus*
Zech. *Zechariah*
Zeph. *Zephaniah*

經 外 典 (Apocrypha)

- Baruch** *Baruch*
Bel and Dragon *The History of the Destruction of Bel and the Dragon, cut off from the End of Daniel*
Ecclus. *The Wisdom of Jesus the Son of Sirach, or Ecclesiasticus*
1 Esd. *I. Esdras*
2 Esd. *II. Esdras*
Judeth *Judeth*
1 Macc. *The First Book of the Maccabees*
2 Macc. *The Second Book of the Maccabees*
Pr. of Man. *The Prayer of Manasses King of Juda, when he was holden*

- captive in Babylon*
Rest of Esther *The Rest of the Chapters of the Book of Esther, which are found neither in the Hebrew, nor in the Caldee*
Song of Three Children *The Song of the Three Holy Children, which followeth in the Third Chapter of Daniel after this place.... That which followeth is not in the Hebrew...*
Susanna *The History of Susanna, set apart from the Beginning of Daniel, because it is not in Hebrew, as neither the Narration of Bel and the Dragon*
Tobit *Tobit*
Wisd. of Sol. *The Wisdom of Solomon*

3. CHAUCER の作品名

- Adam** *Adam Scriveyn*
Anel. *Anelida and Arcite*
Astr. *A Treatise on the Astrolabe*
Bal. Compl. *A Balade of Complaint*
B.D. *The Book of the Duchess*
Bo. *Boece*
Buk. *Lenvoy de Chaucer a Bukton*
Ck.T. *The Cook's Tale*
Cl.T. *The Clerk's Tale*
Compl. d'Am. *Complaynt d'Amours*
C.T. *The Canterbury Tales*
C.Y.T. *The Canon's Yeoman's Tale*
Form. Age *The Former Age*
Fort. *Fortune*
Frankl.T. *The Franklin's Tale*
Fr.T. *The Friar's Tale*
Gen. Prol. *The General Prologue*
Gent. *Gentillesse*
H.F. *The House of Fame*
Kn.T. *The Knight's Tale*
Lady *A Complaint to his Lady*
L.G.W. *The Legend of Good Women*
Manc.T. *The Manciple's Tale*

- Mars** *The Complaint of Mars*
Mel. *The Tale of Melibee*
Merc.B. *Merciles Beaute*
Merch.T. *The Merchant's Tale*
Mill.T. *The Miller's Tale*
Mk.T. *The Monk's Tale*
M.L.T. *The Man of Law's Tale*
N.P.T. *The Nun's Priest's Tale*
Pard.T. *The Pardoner's Tale*
Pars.T. *The Parson's Tale*
P.F. *The Parliament of Fowls*
Phys.T. *The Physician's Tale*
Pity *The Complaint unto Pity*
Pr.T. *The Prioress's Tale*
Purse *The Complaint of Chaucer to his Purse*
Rom. *The Romaunt of the Rose*
Rv.T. *The Reeve's Tale*
Scog. *Lenvoy de Chaucer a Scogan*
Sec.N.T. *The Second Nun's Tale*
Ship.T. *The Shipman's Tale*
Sq.T. *The Squire's Tale*
Sted. *Lak of Stedfastnesse*

Sum.T. *The Summoner's Tale*
Thop. *Sir Thopas*
Tr. *Troilus and Criseyde*
Ven. *The Complaint of Venus*

W.B.T. *The Wife of Bath's Tale*
Wom. Nob. *Womanly Noblesse*
Wom. Unc. *Against Women Uncon-*
stant

4. SHAKESPEARE の作品名

All's W. *All's Well That Ends Well*
Antony *Antony and Cleopatra*
As Y. L. *As You Like It*
Caesar *Julius Caesar*
Corio. *Coriolanus*
Cymb. *Cymbeline*
Errors *The Comedy of Errors*
Hamlet *Hamlet, Prince of Denmark*
1 Hen. IV *The First Part of King*
Henry IV
2 Hen. IV *The Second Part of King*
Henry IV
Hen. V *The Life of King Henry V*
1 Hen. VI *The First Part of King*
Henry VI
2 Hen. VI *The Second Part of King*
Henry VI
3 Hen. VI *The Third Part of King*
Henry VI
Hen. VIII *The Famous History of the*
Life of King Henry VIII
John *The Life and Death of King John*
Kinsmen *The Two Noble Kinsmen*
Lear *King Lear*
Love's L. L. *Love's Labour's Lost*
Lucrece *The Rape of Lucrece*

Macbeth *Macbeth*
Measure *Measure for Measure*
Merch. V. *The Merchant of Venice*
Merry W. *The Merry Wives of Wind-*
sor
Mids. N. D. *A Midsummer Nights Dream*
Much Ado *Much Ado About Nothing*
Othello *Othello, the Moor of Venice*
Pericles *Pericles, Prince of Tyre*
Rich. II *The Tragedy of King Richard*
II
Rich. III *The Tragedy of King Richard*
III
Romeo *Romeo and Juliet*
Shrew *The Taming of the Shrew*
Sonnets *Sonnets*
Tempest *The Tempest*
Timon *Timon of Athens*
Titus *Titus Andronicus*
Troilus *Troilus and Cressida*
Twel. N. *Twelfth Night; or, What You*
Will
Two Gent. *The Two Gentlemen of*
Verona
Venus *Venus and Adonis*
Winter's *The Winter's Tale*

目 次

序	vii
凡 例	x
略形一覽表	xii
新 英 語 学 辞 典	1-1315
主要英語辞典解説	1317
主要定期刊行物案内	1327
参考文献	1333
日英用語対照表	1445
索 引	1465

A

abbreviation 〔文〕(略記, 省略; 略語)

(1) 語・句の表示を, その一部だけで行なうことを略記あるいは省略といい, 略記された語を略語という. 省略には音声の省略(例: 'cause = because; ne'er = never)と, 表記上の省略, すなわち略記(例: Feb. = February)があるが, 略記にはさらに & (=and), £ (=pound(s)), + (=plus, and) のような記号表示をも含めることができる.

(2) 音声の省略については ⇒ ELISION.

(3) 略記には, 原語(句)の尾部省略(この中には頭字表記も含む), 頭部省略, 頭尾部省略がある(後述(6)参照): Sun. (=Sunday), lb. (=libra 'pound'); P.O. (=Post Office); 'spite (=despite); tec (=detective). さらに末尾字を保存する場合もある: Mr. (=Mister), bldg. (=building), viz (=videlicet; z は et を表わす中世ラテン語の記号 *et* から), a gd (=good) job. こうした中部省略の略記を縮約(contraction)ともいう.

どの分野, どの文体の英語にもそれぞれ特有の略記が用いられるが, そこで用いられるのは英語の略記だけでなくラテン語その他から借入された略記もある: cf. (=L confer 'compare'), etc. (=L et cetera 'and others'), et al. (=L et alii 'and others'); D.C. 《音楽》(=It. da capo 'repeat from the beginning').

英語の省略表記は中世の写本にもあり, 古くから見られる. しかし写本の略記は(ラテン語から借用の)記号によって行なった一種の縮約の表記である: *et* (=L et 'and'; 字母 *z* に似ている), *p'to* (=p'to 'thereto'), *dn̄s* (=dominus 'lord'), *cū* (=cum 'with').

今日では略記の場合, 省略記号(period) (.) を用いるのが原則であるが, それは Mr., Mrs. (16-17世紀頃), St. (18-19世紀) から察せられるように ModE 期になってからの慣用である.

(4) 現代英語の略記.

(a) 略記の表示. 今日の略記は尾部省略, 頭字表記, 縮約が大部分であり, 句の略記も主な構成要素の頭字表記(後述(5))で行なうが, いずれの場合も省略記号(.)をつけるのが原則である: F(ahr). (=Fahrenheit), Prof. (=Profes-

sor), M.P. (=Member of Parliament; Military Police), Mt. (=Mount). しかし, イギリス英語では縮約形の場合, 省略記号を省く傾向がある: Mr (=Mister), vs (=versus), do (=ditto).

(b) 略記の読みかた. 次の四つがある. (i) 頭字表記の語を字母名で読む: a.m. [éi ém] (=L ante meridiem 'before noon'), T.B. [tí:bí:] (=tubercle bacillus). (ii) 頭字表記を音節にして読む: SPAR [spəə] (=L semper paratus 'always ready' 米国沿岸警備隊婦人予備隊員), VIP [vip] (=very important person). (iii) 原語句に直して読む(ラテン語の場合は対応する英語で読む): Mr. [místə], Mlle. [mædəm(w)əzél]; lb. [paund], viz (=L videlicet 'namely'). (iv) (i) の方式でも (iii) の方式でもよい: M.P., s.v. (=L sub voce [verbo] 'under the word'). また (i) と (ii) を併用する場合もある: VTOL [ví:toul] (=vertical takeoff and landing).

(c) 略記語の屈折変化. 略語・略記の中には, 人や事物の名称として名詞的に用いられるものが多いが, 副詞的なもの(A.D.=Anno Domini / incog.=It. incognito 'unknown' / ult.=L ultimo 'last month' / e.g.=L exempli gratia 'for example'), 動詞的なもの(loq.=L loquitur 'speaks')もあり, O.K.'d (=accepted) のように規則変化をするものもある.

略記された名詞は他の一般の名詞と同じように屈折する(例: in J.'s opinion (属格))が, 複数形には次の三つの型が見られる. (i) 単複同形(単位名): 2 doz. (=dozen(s)), 10 m.p.h. (=miles per hour). (ii) -s, -s 複数(これが一般の型): M.P.'(s), O.K.'s / Nos.(s) (=numbers), vols. (=volumes) / exams (=examinations), gs. (=guineas 《英》). (iii) 文字反復: vv. (=verses), ll. (=lines), pp. (=pages), MSS. (=manuscripts).

(5) 頭字表記と頭字語. 頭字表記の略記語が省略記号を廃し, 原語句から独立して一つの語になったとき, この語を頭字語(acronym, letter word)または頭文字語(initial word)という. 頭字語は(a)字母で読む場合もあるが, (b)音節をなすものとして独自の発音をもつ場合もある(上述(4)(b)参照). (a)の場合を initialism, (b)の場合を acronym と用語を区別すること

もある。(a) アルファベット読み: TB [tí:bí:], TNT (=trinitrotoluene), FBI (=Federal Bureau of Investigation). (b) 音節読み: Nato [néitou] (=North Atlantic Treaty Organization 北大西洋条約機構), Awol [éiwó:l] (=absence without leave), VIP [vip], UNESCO [ju:néskou] (=United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization).

頭字語ないし頭字表記は、最近、特にアメリカで多く用いられ、政治・軍事関係団体などの名称の短縮形として盛んに用いられるに至った。こうした固有名詞的な略語・頭字語を tip-name ともいう (Wentworth & Flexner (eds.), 1960, p. 600).

(6) 略記と略語.

(a) 略記が原語句から独立して独自の語になった場合これを略語 (clipped word), 切り株語 (stump-word) (Jespersen, *MEG*, Vol. 6, § 29.41) という。略語は coz (=cousin) にその例を見るように、15-16 世紀頃から後、俗な表現で発達したものであり、その中には口語・標準語に用いられるようになったものも数多く見られる。略語には次のような種類を区別することができる。(i) 尾部省略 (back-clipping) の略語: ad (=advertise(ment)), auto, exam, mike, mob, piano, taxi. (ii) 頭部省略 (fore-clipping) の略語: bus (=omnibus), ism, phone. (iii) 中部保存の略語 (数は少ない): flu (=influenza), tec (=detective), Liz (=Elizabeth). (iv) 複合略語 (clipping-compound): cablegram (←cable telegram), newsboy (←newspaper boy). (v) 省略語 (elliptical word). ‘限定詞+名詞主要語’などの句で、しばしば主要語が(稀に限定詞が)省略される。これは省略 (ELLIPSIS) の一つの場合ということができる。{() 内省略} a copper (coin), Danish (pastry), an epidemic (disease), a return (ticket); a cup (of coffee) 《米俗》, the Tower (of London); (Indian) corn 《米》, the (Greenwich) Village in New York.

(b) 略語の変形。小児言語 (NURSERY LANGUAGE) では、長い語、難しい語を略語化して呈示するが、その場合、原語に対して多少変化が加えられることがある。発音しにくい音はしばしば他の音に変わる: Pol(ly)~Moll (←Mary), Hal (←Harry, Henry), Dick~Rick (←Richard). 人名その他の略語形はしばしば愛称接尾辞 -y, -ie をつける (⇒HYPOCORISM): Eddy~Teddy (←Edward), Betty (←Elizabeth); hanky (←handkerchief), movie (←moving picture); comfy (←comfortable).

ablative (case) 〔文〕(奪格)

(1) 定義・機能。インドヨーロッパ語族の格 (CASE) の一つで、ギリシア語、ゲルマン語、スラヴ語では消失したが、ラテン語には名詞・代名詞・形容詞のいずれにも残っていた。この名称は Julius Caesar の命名 (L cāsus ablātivus) による。この格は、本来、分離・原因・比較の基準を示したが、ラテン語では具格と所格の機能をも持ち、手段・起源・作因・時・場所などをも表わすことができた。ModE では, from, out of; at, in; with, by; than などの前置詞を用いて表現できるので、これを *from-at-with case* ということもある。

(2) ラテン語の例: Puella mensam reginae rosis ornat. (=The girl decorates the queen's table with roses.). 英語でも使われるラテン語句: bona fide (=in good faith) / impromptu (=in readiness) / prima facie (=at first sight). ラテン語の前置詞 a (=from), ex (=from, out of), pro (=for) などは常に奪格をとる: a priori (=from what is before) / ex cathedra (=from the chair (of authority)) / ex libris (=from the books (of so-and-so)) / in propria persona (=in one's own person). なお, via Alaska の via も本来は via (=way) の奪格 (明示的に viā と書く) で, by way of の意味である。

(3) 意味上、主語・述語の関係にある奪格の2要素が併置され、副詞的修飾語[節]の機能を持つものを絶対奪格 (ablative absolute) という。英語に現われるこの種のラテン語句には, ceteris paribus (=other things being equal) / deo volente (=God willing) / durante vita (=during life) / mutatis mutandis (=things to be changed having been changed) などがある。類似の構文はラテン語以外の言語にも見られ、サンスクリットでは所格(または属格)、ギリシア語では属格(ときには対格)、ドイツ語では対格(ときには主格)を用いる。OE ではラテン語の影響によって与格[方言によっては対格ないし主格]を用いた (⇒DATIVE ABSOLUTE). ModE の *All things considered, the offer seems reasonable.* のような場合は主格と考えられて、絶対主格 (nominative absolute) と呼ばれ、代名詞の場合には主格が用いられる。

abridged clause 〔文〕(短縮節)

Curme (1931, pp. 176-80) の用語。統語的に節 (CLAUSE) の形式を備えているわけではないが、意味上は節と見なすことのできる語群をいう。condensation ともいう。Better dead!—Galsworthy (=It would be better if he were

dead!) / Out of sight, out of mind. (《諺》 (=If something is out of sight, it soon passes out of mind.)) などは古くからよく用いられる表現形式であるが、これらは接続詞や定動詞を欠く表現でありながら、あたかも複文 (COMPLEX SENTENCE) の構造を持つものであるかのように解釈される。この種の表現形式はその力強さと簡潔さのために口語体では古くから用いられてきたが、今日では接続詞や定動詞を備えた節が発達し、この歴史的には新しい形式のほうが完全な節と考えられるようになった。これに対して *She is regarded more highly than he (is regarded)*. における *than he* は、定動詞を欠くという点で短縮節と類似しているが、Curme によれば、これは省略節 (elliptical clause) である。

現代英語で用いられる短縮節にはいろいろな種類のものがあるが、その主なものは次のようなものである。(a) 分詞を含むもの: *Going down town, I met an old friend.* (町へ行く途中で昔の友達に会った)。(b) 動名詞を含むもの: *I am opposed to John's going to their house.* (ジョンが彼らの家に行くことに反対だ)。(c) 動詞的名詞 (VERBAL NOUN) を含むもの: *After the loss of his fortune he had to change his manner of living.* (財産を失ってから生活の仕方を変えざるをえなかった)。(d) 不定詞を含むもの: *I hope to finish the work this evening.* (今晚までにこの仕事を終えたい)。(e) 前置詞句が節として用いられるもの: *He put on his socks with the wrong side out.* (靴下を裏返しにはいた)。(f) 目的格叙述語 (objective predicate) を含むもの: *She boiled the egg hard.*—[上例すべて Curme] (彼女は卵を固ゆでにした)。

absolute 〔文〕 (絶対的, 独立的) ある語が他の語と統語的に結合して用いられる文法事象を結合的 (conjunct) というのに対し、意味的に相等関係にあり、かつそのような結合関係なしに独立して用いられる文法事象を絶対的または独立的という。例えば *It is my book.* と *It is mine.* において、*my book* は結合的であるが *mine* は絶対的である。また *my* と *mine* はそれぞれ結合形 (conjunct form), 独立形 (absolute form) といわれる (Sweet, NEG, § 55)。さらに *Is he here?* に対して *No.* と答えた場合、この *No.* は *He is not here.* と同等であるので独立形であるが、*He is not here.* の *not* は結合形である (Sweet, NEG, § 368)。また *I call.* の *I* は動詞と密接に結びつくので結合形であるが、*It is I.* の *I* は *He saw me.* における *me* の位置

にあるので独立形をとるのが適当と感じられて *It is me.* と表現されると解釈できる。形容詞に関していえば、*New rules should destroy the authority of the old.* (新しい規則は古い規則の権威を打ち破るべきである) のように、2 度目に繰り返される名詞が省略された場合の用法を形容詞の絶対的用法 (absolute use) といい、このように用いられた形容詞を絶対形容詞 (absolute adjective) という。この場合現代英語 (特に口語) では支柱語の 'one' (PROP-WORD ONE) が付加されて *the old ones* となるが、口語でない場合は名詞を繰り返して *the old rules* とすることもある (Sweet, NEG, § 2069)。*The good are happy.* (善良な人々は幸せだ) の *the good* のように絶対形容詞ではなく独立形容詞 (FREE ADJECTIVE) の場合は、支柱語の 'one' が付加されないので注意しなければならない (Sweet, NEG, § 180)。なお Poutsma (*Grammar*, Vol. 3, ch. 28, § 11) は絶対形容詞を Sweet よりも広く解し、形容詞が主要語から離れて用いられる場合 (形容詞の主要語が文脈から理解される場合) をすべて絶対的用法と呼ぶ: *the biggest of the boys* (一番大きな少年) / *white and red roses* (白バラと赤バラ)。以上のほかに絶対的用法の例としては他動詞が目的語をとらずに用いられる場合がある: *He likes to give.*—[Curme] (彼は人にものをあげるのが好きだ)。さらに次のような助動詞も絶対的用法と呼ばれることがある: *Did you tell him?*—*Yes, I did.* ⇒ PRO-VERB.

absolute adjunct 〔文〕 (独立付加詞)

Kruisinga (*Handbook*, Vol. 4, §§ 2099–2104) の用語。付加詞とその主要語はときに休止 (pause) とか他の語によって分離されることがあるが、そのような場合の付加詞を Kruisinga (*Handbook*, Vol. 4, §§ 2090ff.) は遊離付加詞 (free adjunct) と呼ぶ。例えば *A mining engineer, he had come home only yesterday from a long absence abroad.*—A. Kenealy [Kruisinga] (鉱山技師は、長い外国出張から昨日帰国したばかりであった) における *a mining engineer* が遊離付加詞である (cf. predicate appositive ⇒ PREDICATE)。このような遊離付加詞のうちでそれ自体の中に主語と見なされる語句を含むものが独立付加詞である。Bridget sat sewing in the garden, her thoughts more busy than her fingers.—Vachell [Kruisinga] (ブリジットは庭に出て坐って縫い物をしていたが、彼女の頭は考えごとで一杯で、その指の動きは鈍りがちだった) / *Slowly, she first, we went*

down the narrow stairs to my landing.—Arlen [Kruisinga] (私たちはゆっくりと、彼女を先頭に、私の目的の階の踊り場まで狭い階段を下りて行った)などにおける斜体字の部分が独立付加詞であるが、このような付加詞は Jespersen のいうネクサス三次語 (nexus tertiary) に当たる (⇒ NEXUS)。意味上は主文に対して付帯状況を表わしている場合が多い。Dinner being over, Bathsheba, for want of a better companion, had asked Liddy to come and sit with her.—T. Hardy [Kruisinga] (食事が終わって、ほかに話し相手もいなかったの、パスシバはリディーに自分のところに来て坐るように言った)におけるように分詞構文が独立付加詞として用いられる例は多い (⇒ ABSOLUTE PARTICIPLE)。また *Theory apart*, we are all entirely convinced. —J. Laird [Kruisinga] (理論のことは別として、我々は皆すっかり納得している)におけるような独立付加詞は慣用句に近いものである。付帯状況を表す前置詞 with, without に導かれる独立付加詞の例も少なくない: He sat reading, *with his wife sewing beside him*. (妻が縫い物をしているところで彼は読書をしていた)。

absolute comparative 〔文〕(絶対比較級) 比較の対象を特定することなく、ただ一般に程度が高いことを示す比較級。相対的な比較を表す相対比較級 (relative comparative) に対する。絶対比較級は絶対最上級 (ABSOLUTE SUPERLATIVE) ほど多くは用いられない。the *lower classes* (下層階級) / *higher education* (高等教育) / a *better-class café* (高級料理店) / the *more complex problems of life* (人生の複雑な諸問題)。

絶対比較級のもつ意味は形容詞の原級の前に tolerably, fairly, rather などの副詞を添えることによって表わされる: a *tolerably* [fairly, rather] long walk (かなり長い散歩) / *somewhat* talkative (少しおしゃべりの) —[上例すべて Curme]。

absolute genitive 〔文〕(遊離属格)

(1) Poutsma (*Grammar*, Vol. 3, ch. 24, § 47) の用語。= INDEPENDENT GENITIVE。

(2) 属格が限定する主要語が慣習により表現されず、独立して名詞的に用いられる属格をいう。Sweet (*NEG*, § 2008) はこれを省略属格 (elliptical genitive) と呼び、Poutsma (*Grammar*, Vol. 3, ch. 24, § 50) は実詞属格 (substantive genitive) と呼ぶ。この種の属格には次の3種類がある。(i) 住居。訪問の対象となる親族関係

の名詞や固有名詞: I'm staying at my *aunt's*. / I'll be at *Bill's*. 特定の家でない場合には主要語が必要となる: Two or three times a week she plays bridge at *friends' houses*.—B. S. Rowntree & G. I. Lavers [Scheurweghs]. (ii) 教会・クラブ・学校・病院・劇場などの建物・公共施設。固有名詞がふつう: St. Paul's (Cathedral); St. John's, Queen's (College); St. Bartholomew's, St. Luke's (Hospital) (cf. Guy's Hospital); St. James's (Palace [Theatre]); Claridge's (Hotel) [() 内の主要語を用いた場合は同格属格 (APPOSITIVE GENITIVE)]. (iii) 店舗など営業の行なわれる場所・建物: a butcher's [chemist's (=《米》druggist's), grocer's, florist's, tobacconist's, stationer's] (shop); I took her to the *doctor's* [dentist's] (office). いずれの場合も広義の「場所」を表す名詞が含意されることから、この種の属格は場所の属格 (local genitive) と呼ばれ、ふつう at, in, to などの前置詞と結合して使われる。上の (iii) の場合は、店の顧客・機能の観点からの表現であり、機能と無関係に単なる建物として扱うときは -'s shop の形が使われる (Zandvoort, 1975, § 282)。なお大企業・百貨店などは集合的・複数的性質のためアポストロフィーが省略され、複数扱いになることが少なくない: Selfridges, Harrods. ‘固有名詞+普通名詞’のときは、at *Parker's*, the *bookseller's* のように両方とも属格にするのがふつうで、前者だけを属格にする形は後者が長い場合以外は稀である。‘普通名詞+固有名詞’では後者だけを属格にするのがふつうであるが、肩書のある固有名詞では前者だけを属格にすることが多い: at my *friend Smith's* / at my *aunt's Mrs Mowbray*。

(3) 人称代名詞の遊離属格 (= 独立所有代名詞) が特殊な意味で用いられることがあり、Kruisinga (*Handbook*, Vol. 3, § 851) はこれを独立所有格 (absolute possessive) と呼ぶ。(i) 家族などを示す場合。対応する同数同人称異格の人称代名詞の後に and で結ばれるのがふつうであるが、古風で形式的である: With best wishes for you and *yours* (= your family).—[Zandvoort]. (ii) 手紙・商業書簡: *Yours* (= Your letter) of the 18th reached me yesterday. (iii) 手紙の結尾 (yours に限られる): *Yours truly* / *Sincerely yours*. (iv) It is not *yours* (= your task, your duty, your business) to decide. (v) They can't tell *mine* from *theirs*. (彼らは私のものと彼らのもののけじめがつかない)。

absolute infinitive 〔文〕(独立不定詞)

文中の他の部分から比較的独立して離接的 (disjunctive) に用いられる不定詞をいう。この名称はふつう 'to' 付き不定詞の場合に限り適用される。独立分詞と同じく、文修飾の離接的副詞句の一種で、意味上、条件・譲歩などを表わす節・句に相当し、一般に、他の部分の表現・内容に対する話者の態度・意見を表明する決まり文句に多い: to tell the truth / to be frank [honest] (with you) / to be sure / to begin [start] with / to do a person [thing] justice / to make matters worse / so to speak, etc.

なお、意味上の主語(代名詞では主格を用いる)が先行することもあるが、この構文は主要部に対する付帯的事情を表わす。Kruisinga (*Handbook*, Vol. 2, § 240) はこれを独立語幹 (absolute stem) と呼ぶ。法律の文章などに見られるが、一般には稀: John Norman endowed his guild with his tenements, they to provide a beam light and lamp to light the lane.—[Scheurweghs] (ジョン・ノーマンは彼の同業者組合に自分の共同住宅を贈与したが、路地を照らす街燈と電燈は組合が用意しなくてはならなかった)。

absolute participle 《文》(独立分詞)

文の副詞的修飾要素として働く現在分詞・過去分詞で、それ自身の主語を持ち、文法上主文に依存しないものをいう。Kruisinga (*Handbook*, Vol. 2, § 115, Vol. 4, § 2101) はこのような現在分詞を独立の 'ing' (absolute ing) と呼ぶ。この構文は独立分詞構文 (absolute participial construction) と呼ばれる。また、この構文の主語を絶対主格 (nominative absolute, absolute nominative) といい、構文を主格独立構文 (nominative absolute construction) と呼ぶことがある (⇒ DATIVE ABSOLUTE)。主語は、代名詞の場合、主格が用いられる: They being absent, nothing could be done. この構文は OE では比較的稀であったが、ME 中期頃から教会ラテン語 (Church Latin) の影響で次第に多くなり、1660 年の王政復古あたりから盛んになり、やがて英語に定着したものである。

独立分詞が主文とどのような意味的關係で結ばれるかは明らかでないこともあるが、多くの場合、理由・原因・時・条件・譲歩・付帯状況を表わす接続詞を用いた従属節に相当し、文全体にかかる修飾語句と見ることもできる: No further discussion arising, the meeting was brought to a close.—[Quirk et al.] / All our savings gone, we started looking for a job.—[Quirk et al.] / We sail on Tuesday, weather permitting. /

A small boy, his satchel trailing behind him, ran past.—[Quirk et al.].

分詞の意味上の主語を省略することがあるが、これは大体一定の語句に限られる。この場合、分詞は一種の前置詞あるいは接続詞と見られるようになることが多い: considering, granting, including, seeing / judging from... / taking all things into consideration. Curme はこの種の分詞を懸垂分詞 (DANGLING PARTICIPLE) と呼ぶ。

一般に、独立分詞は文語的で、口語では一定の決まり文句のほかはふつう使われない。

absolute superlative 《文》(絶対最上級)

相対的に他と比較して程度が優っていることを表わす相対最上級 (relative superlative) に対し、他との比較を含まず、それ自体の程度が非常に高いことを表わす最上級をいう。

絶対最上級の主な特徴は次の点である。(a) ふつうは -est で最上級をつくる語でも 'most+原級' の形式で表わすことが多い: Everybody has been most kind.—[Zandvoort] (誰もが大変親切だった)。この場合、注意すべきことは絶対最上級の most には一般に強勢がないことである: He has the most beautiful of gardens.—[Curme, 以下同じ] (彼は大層美しい庭を持っている) [絶対最上級] / It is the most beautiful flower in the garden. (それはこの庭で一番美しい花です) [相対最上級]。

(b) -est で最上級をつくる形容詞および不規則比較変化の形容詞の場合にも most を用いず、それ自体の最上級の形で絶対最上級を表わすことがある: I'm in the best of health. (健康は上々だ)。この場合、しばしば形容詞は引きのばし強勢を伴って発音される: Oh, he made the rú-dest remark! (彼は誠に不法なことを言ったものだ)。

(c) 最上級が my, any, every, each, no, some, certain などの限定形容詞によって修飾されている場合、あるいは修飾語を全く持たず、しかも特に抽象名詞や複数名詞が後に続く場合には -est の最上級が用いられる: my dearest darling (わが最愛の人) / there is no smallest doubt (わずかの疑念もない) / I owed her deepest gratitude. (彼女には大層お陰をこうむっている)。

(d) '定冠詞+名詞(形容詞の最上級からの転用)の副詞的(中性)対格'の形を用いることによってつくられることがある: It does not matter the least.—F. Montgomery (少しも問題にならない)。またこの形の代わりに制限形容詞の最上級を含む前置詞句を用いることがよくあ